



光桂寺だより

第207号

真宗大谷派 光 桂 寺 〒838-0133 福岡県小郡市八坂201
TEL 0942-72-2432 FAX 0942-72-2486 印刷 片山印刷(有)

春の永代経 ご案内

新緑の季節となりました。今年の冬は、予報どおりの暖冬となり、昨年よりは過ごし易く終わつたようです。

四月は選挙で、国中騒々しく明け暮れました。地方の政局と中央の進め方が折り合わずに、その結果が出た福岡県の知事選挙、中央集権的な考え方は、地方では馴染まないようです。

五月最大の関心事は、何といつても新元号の発足でしょう。「令和」の年号、今のところ馴染めていませんが、使うに従つて違和感は薄れていくものと思えます。しかし最も関心をもつておかねばならないことは、新元号になつて、どのような社会となつていくのか、そこがポイントだと思います。しっかりと世の中を見守つて過ごしていきたいものです。

それぞれの「私」に対しても、しっかりと向き合い、考えながら過ごすことが最も大切なことであります。今の時代、考えることがおろそかになつていっているように見えますが、皆さんはどのように捕らえておられるか、各自振り返つてみては如何でしょうか。その機会の一つとして、「春の永代経」を考えていただきたいものです。

毎日何かとせわしく過ごしてしまいがちですが、「春の永代経」を勤めますので、一服の清涼剤と思ひご参詣くださるようご案内いたします。

期日二〇一九年五月十一日(土)

○おとぎ 正午

○おつとめ 十三時

○法 話 十四時

講師 光澤 寺様

※お世話前 京手、十楽
よろしくお願ひいたします。

永代経志ご寄付者ご芳名

誠にありがとうございました。

第十九回誕生お祝いの会ー花祭り

「お誕生おめでとぅーございます」

四月七日十一時より、「第十九回誕生お祝いの会」と、合わせて花祭りを開きました。

桜の花がまだ残る、快適な天候に恵まれた中、三組の該当の方がおられました。当日は二組の方の参加を得ました。おごそかな雰囲気の本堂で、華やかな花御堂に甘茶をそそぎ、頂きながら過ごしていただきました。その後庫裏でのささやかな祝宴を開き散会いたしました。



二〇一九年度

光桂寺門徒会役員紹介

会長（責任役員）

若菜 久光

副会長（教区門徒会員）

山下 睦雄

書記（教区門徒会員）

井手 義一

書記

廣瀬 勝栄

会計

末次 勝行

婦人会長

古賀 千代子

（教区門徒会員）

松島 和江

自分との向き合い

光桂寺婦人会総会での
「蒲原稔彦」講師のお話要約

歎異抄

親鸞さまの弟子のお一人「唯円」さ

まが、お師匠である親鸞さまに、親鸞さまの教えを確かめるため、ご自分の疑問を問いかけられ、そのやり取りを唯円さまが綴られたご本であります。

蒲原先生は「自分との向き合い」を、歎異抄

の第九章を紐解きながらお話くださいました。

歎異抄 第九章（原文は紙面の都合で省略）

〈唯円〉「念仏を称えているのですが踊りあがるような喜びの心が溢れてきません。また、急いで浄土に往生したいという心も起きてきません。これは、どのように考えればいいのでしょうか」

このように親鸞聖人にお尋ねしたところ、〈親鸞〉「私もそのような疑問があったのですが、唯円房（房―僧の名前にそえることば）も同じ気持ちを持つていたのですか。よくよく考えてみれば、浄土に往生することが決まるということとは、天に踊り地に踊るほどに喜ぶべきことなのに、それを喜ばないということ、いよいよ私の往生が確かであると思われるのです。喜ぶべきことなのに、それを喜ばないというのは、煩惱（心やからだを悩ます一切の欲望）のしわざです。ところが阿弥陀仏は、ずっと前からそのこと（人間そのものが煩惱ををまわっているということ）を知っておられて、私たちのことを、煩惱のかたまり（である）と見抜かれています。

阿弥陀仏が他力念仏（阿弥陀さまの私たちを浄土へ導こうとの切なる願い）をお説きになった本意（本当のお気持ち）は、そのような（煩惱をしっかりと具えた）私たちをこそ助けようとするもの（阿弥陀さまのお助けの対象）であったということがわかるのです。だからこそ、

いよいよ往生は確かであると、頼もしく思われるのです。

また、浄土に急いで往生したいという心がなくて、少しでも病気になるかと死ぬのではないかと、心細くなってしまうのも、煩惱のしわざです。

（私たちは）遠い昔から今日まで、流転を続けてきた（迷いながらさまよい、悩み苦しみ続けている）迷いと苦しみの世界であるこの世は（苦しいながらも）捨て難く、（また一方）いまだかつて生まれたことのない安養浄土（安樂の世界である浄土）が慕わしく思えないというのも、盛んに起こっている（しつかり自分に備わっている）煩惱のしわざなのです。

どんなに名残惜しいと思っても、この世の縁が尽きて力なく死んでいくときが来たら、かの浄土に往生することになるのです。

急いで往生したいと思わないもの（私たち）を特にあわれに思われているのが阿弥陀仏です。このような自分であることを知ることによって、いよいよ阿弥陀仏の大慈悲と本願（すくいの心）が頼もしく思え、往生がいよいよ確かであると思えるのです。

踊りあがるほどに喜び、急いで浄土へ往生したいという心が起こってきたとすると、自分には煩惱がないのだろうか、かえって変に（普通の人間ではないのではと）思われるのです」

〈唯円〉「このように親鸞聖人は言われました」

自分との向き合いから煩惱に満ちている自分に領いて、阿弥陀さまの救い（阿弥陀さまの救おうという願い）に与つていく（身を委ねることができ）、ありがたさに気付き、領いていこうということ、蒲原先生は沢山のたとえ話を交えながら話されました。

文中のカッコ内の文章やアンダーラインは、住職が付しております。また添付されていた資料は、次号で出来れば主な部分について、掲載する予定です。

門徒会総会が開催されました

四月十三日に二十八名の参加を得て開催されました。主な承認された事項は、二〇一九年度の決算、年間行事、門徒会館建設関連事項などでした。

この内の門徒会館建設については、建設の必要性とこれからの進め方の指標となる、門徒会館建設委員会会則の承認があり、これを受けての第一歩である建設検討小委員会の立ち上げも認められました。

これからの流れとして、建設検討小委員会で必要な設計図面の案を含めて種々検討をして、その結論をまとめ光桂寺総代会へ提示。光桂寺総代会はこれをたたき台にさらに検討を加え、光桂寺門徒会へ提示。門徒会総代会は提示された

事を検討し、最終の段階は門徒会総会へ提案、承認されれば建設に向けての建設委員会が設置されて事が進められていきます。

流れを示しますと

建設検討小委員会（図面）↓光桂寺総代会（五名）↓門徒会総代会（十名）↓門徒会総会
この流れで進められます。

門徒会館建設（庫裡）については、これまでに光桂寺だより一八八号、一九二号、一九四号、二〇六号と四回にわたって掲載しているところですので是非参照ください。

光桂寺門徒会収支決算報告

総代世話人が居られる地区については、ご面倒ながら光桂寺門徒会総会で配布の決算書をご覧下さい。その他の地区の方には、決算書を同封しておりますので、ご覧下さい。

総代さんの交代

これまで総代さんをされていた次の方が退かれました。

（馬渡）高松 義治（宝城団地）大藪 甲

（末次）鶴本 俊洋

お世話方ありがとうございました。

四月より次の方が門徒会総代となられました。よろしく願います。

（馬渡）廣瀬 勝栄（宝城団地）今村 義之
（末次）末次 一信
なお廣瀬勝栄さんは、門徒会総代として、書記の役に就かれます。また光桂寺総代を兼ねられます。

謹んでおくやみ申し上げます

教区の動き(組再編)に関心を

十年ほど前より検討が始まったがここに来て、人口減、宗教離れ(寺離れ)、葬式離れ、墓じまいなどが進む中、さらに信心の不継続、長寿社会、お一人さまの増加も加わり、教団も対応せざるを得ない状況となっている。

そこで始まった教区の統合がこの九州で開始した。九州にある久留米、長崎、熊本、鹿児島、日豊(大分)の五つの教務所を統合し、九州教務所となることが決められた。

さらに進んで、教区の下の組織である「組」を再編しようという動きになっている。現在「光桂寺」が所属している「組」は「三井西組」であるが、久留米教区にはこのような「組」が十九存在する。寺の数は二五八ヶ寺で十九有る「組」の数を、九にしようとする案が示されている。複数の「組」が合併をするという提案である。

「三井西組」が合併するのは、久留米組、三井東組の案であるが、寺数の合計は、三十五の寺となる。このことを今後「三井西組」で検討し決めていかねばならないということとなっている。

ものしり手帳の活用を

お願いします

十九、二十頁を参考に違っていると直

しましょう。不足しているものは補充しましょう。

湯呑でお茶を上げていませんか、×ですよ。

真宗ではお茶はお供えしません。

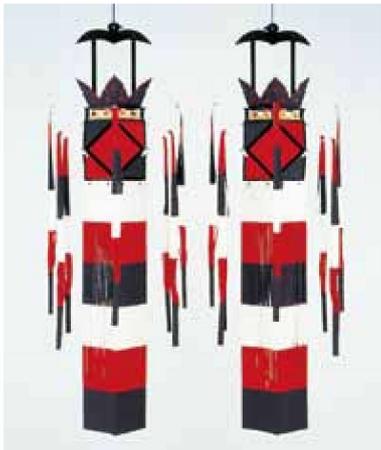
コップで水を上げていませんか、×ですよ。

真宗では水は「華瓶―けびょう」でお供えします。(十三頁参照)

盆を迎えるご門徒さんへ

迎え火、送り火などはいたしません。真宗としては盆灯籠として「切籠(きりこ)」を用います。お内仏(仏壇)の前面に、上から吊り下げます。

従って紋入りの盆提灯は用いけません。以上が真宗本来の正しいお飾りであります。さらに玄関などに提げる「迎え提灯」もお飾りしません。



「講」について考えよう

真宗が大きく育ったのは、この「講」の組織

があった(育った)からなのである。

講は、お茶や食事を囲みながら、お互いの絆を確かめ合い、よろずのできごとや悩みを出し合いながら、お話(法話)を聞き、生き方を学ぶ場であった。そこから信仰心が芽生え、深まって行つたのである。

従つて法要の場は、この「講」の場である。しかし現在では、(おとき)と法話を聞くのみになっているため、本来の「講」の姿がなくなり、交流が薄くなつてしまつていふと思う。

井戸端会議みたいなものを、この講に取り入れてきた歴史が、ここに崩れようとしているのかもしれない。信仰心に結びつかなくなつた真宗、先祖供養から脱皮できないところでは、当然の結果が表れたということではないだろうか。

ところで皆さんの意見が、この賄い(おとき)のお世話前が問題視されている所も見受けられる。そこで

- ・ 賄い(おとき)のお世話前についての意見は、それぞれの組織の中で出して欲しい。変化があつても良いと考える。

・ お茶、お茶菓子で済ませるのが果たしてよいのかどうか。慎重に考えるべきではなからうか。賄い(おとき)のお世話がなければ、参詣にも影響する。いよいよお話を聞く人が少なくなると予想する。対策を考えてから踏み切らねばならないだろう。